

## 科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 04 月 14 日現在

研究種目：基盤研究 (c)

研究期間：2007 年 4 月～2009 年 3 月

課題番号：19520393

研究課題名（和文）抄物を通して見た中世文化の基盤

研究課題名（英文）The base of culture in the middle ages seen through SYOMONO

研究代表者

木田 章義 (KIDA AKIYOSHI)

京都大学・文学研究科・教授

研究者番号：30131486

研究成果の概要（和文）：

建仁寺両足院所蔵の、抄物を中心として、仮名を含む文献を中心に資料調査を行い、写真撮影と整理作業、それに平行して、担当者を決めて資料分析を行った。禅僧の抄物が非常に専門的な内容であり、かつ、大部なものが多いため、予想外に分析に手間取り、資料の影印刊行の予定も大幅に遅れてしまった。調査資料に関する纏まった成果は、1～2年後からということになるが、若手研究者も数人育ち、関係資料もほぼ整理ができた。同時に、漢籍・仏典の調査も行っていたので、五山禅僧の教養の基盤もかなり明らかになり、この面でも大きな成果があがった。

研究成果の概要（英文）：

The document of Ryosokuin in Kennin-ji Temple was investigated. Those material was concurrently analyzed. These are voluminous and very difficult so the result goes out after 2,3 years. Several young researchers also grew up. Related material was able to be arranged almost. The base of Gozan Zen priest's education was considerably clarified.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
20 年度	900,000	270,000*	1,170,000
21 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：両足院、抄物、林宗二、利峯東鋭、梅仙東逋、清原宣賢



## 1. 研究開始当初の背景

両足院所蔵の禅籍、漢籍、抄物の調査は以前からの継続であり、所蔵資料の傾向は予想されてはいたが、これまでの調査が限られていたために、不明な点が多かった。特に禅僧の教養の背景となったものが何であったのか、それをどのように利用していたのかという点になると、明瞭なことは言えない状況であった。

また若手抄物研究者の数もほとんど居ないという状況には変わりはない。その原因は、抄物資料は大部なものが多く、しかも中国文学や仏教学の知識が必要であるために、他の分野に比べて、たいへん労力を要すること、これが一つの原因である。もう一つ、抄物の研究をしようと思っても、抄物資料を利用することが難しいことも大きな原因である。大部分が寺院や文庫の中にあり、複製された資料はごく僅かであるため、研究体制を整えることができない状況が続いている。

## 2. 研究の目的

両足院の典籍調査を通じて、五山の学問僧の教養の基盤を探ることが一番の目的であった。両足院にどんな書籍が所蔵されているか、どういう形でそれを利用していたか、それはどのように作品に現れるのかというような点を明らかにすること、これが基本的な知識となる。この基本的な知識をもとにして、漢籍・仏典を解説した抄物の内容を丁寧に分析し、その解釈がどういうレベルにあるか、その解釈にはどういう注釈が利用されているかなどを明らかにすることによって、当時の禅僧たちの漢籍・仏典の理解度をはかることができる。それは中世の日本文化の基盤の一つでもあり、後の江戸時代の漢文学の盛況へとつながってゆくはずのものである。

したがって、この研究では、両足院に所蔵される典籍の種類と内容、それにそれを注釈した抄物（仮名によるものと漢文によるもの両方）の内容を完全に理解しながら、解釈の変容やその水準を計ることによって、中世文化の根幹を明らかにすること、そして、抄物の中の日本語を分析することによって、中世日本語の実態を明らかにすることも目的の一つである。

以上のこと以外に、若手研究者の育成も目的である。むしろこの方が目的の中心と言ってもよいくらいである。

抄物の研究は中世日本語の研究には必須のものである。しかし、抄物の研究は前述のように、極めて手間のかかるものであり、抄物研究によって論文を発表するのは、他の分野の研究に比べると1、2年遅れることにな

る。これも若手研究者が少なくなっている理由の一つである。調査に、若手研究者を帯同し、一緒に調査することによって、文献の扱い方、文献の利用の仕方、それに分析対象となる未紹介の資料群を実際に手にとり、研究する機会を作ることができれば、より早く、大量の知識を得ることができるはずである。そこで、こういう調査研究に若い人々を加え、より多く、より優れた若い研究者が育つようにしようとした。

## 3. 研究の方法

月に一度、あるいは二月に一度、両足院の蔵書調査を行った。資料は目録の中から、いくつかの資料を対象に選び、(1)漢籍・仏典班と(2)仮名書・抄物班に分け、それぞれ、重要な資料と思われるものを、写真撮影し、内容の大凡を読み取ってゆくという作業を行った。若手研究者の養成は、主として仮名書きを含む資料の分析から行った。この研究によって、禅僧の知識の実態が分かるのと、中世日本語の再現を行えるからである。同時に、その内容から、五山僧の知識の基盤や伝統が分かることも多い。

撮影した写真は、主として私が整理した。多くの場合、大量の写真を各本に分け、さらに各冊に分けるという作業を行い、それを京大文庫研究室の一箇所に保存した。調査班に所属する者は、これを自由に閲覧できるようにし、彼等の全体的な知識が豊かになるように。これらの写真資料を通覧することによって、五山僧の漢文の理解度やその好みの傾向などがよく分かるようになり、五山僧の知識の全体が把握しやすくなる。

そのほか、調査で得た資料を用いて、授業を行い、その分析方法を教え、必要な知識を得るようにした。

## 4. 研究成果

多くの資料の分析を行った。

仏教関係では、宋元版を中心にして、両足院にのみ所蔵されている文献の調査をおこなった。また、写本資料も多くあったが、それらはほとんど中国の仏典の写しであったり、版本の写しであったが、中には、瑞溪周鳳の語録のように、他には見られない貴重な資料もあり、こういう資料も複製公刊してゆく必要があると感じた。また、瑞溪周鳳の作成したと言われる「刻楮集」は伝わらないが、それを抄出した「刻楮」が両足院に蔵されていたということが、両足院の前住職・伊藤東慎氏によって報告されていた。その後、その行方は不明だったが、この調査によって見つ



け出すことができた。

その目録部分は、以下のようになっており、当時の学僧の読んだ典籍の一覧表のようになっている。一見して、極めて重要な資料であることが分かる。

### 刻楮集目録 <朱点黙雲所写[朱]>

一 空索(?)門一一已上四十二人録見天章閑束集

二 牧溪 楞嚴義海

三 詩話総亀 淮南子 蘿山集 江文通文集

潜溪集

√四 √五 √六 √七 太平広記 √八<同> 九

√十 √十一 十二 √十三 類説 √十四<同> 十五 同類説/失却

√十六 大蔵一 √十七鶴林玉露

十八 海録碎事 √十九 劍南統藁 画幔集

楊誠齋 修興十書

√二十 皇朝文翰 閑居偏 退耕録 詩家鼎禱統藁

陳簡齋詩 玉海 南湖集序 子昂

伝

牧溪伝

二十一 大蔵二 二十二 同三//

√二十三 竹圃散人<多語> 康瓠集 会稽志

橘山四六 子昂行状 容齋三筆

四筆

吳越春秋 唐人絶句集 世説新語

新序 群書鈎玄 自警偏

漁樵対問 金明池事迹

二十四 二十五 二十六

√二十七 図絵宝鑑 清容居士集 牧闇先生集

諸子橘林 本巾 古今雜集

瑞岩寿禅師録

√二十八 穎浜文集

二十九 唐書 三十<同>

三十二 容齋統筆五筆

三十五 普門品釈 観音経義疏

三十八 大蔵五

四十 宣和画譜 入蜀記<半> 南山行藁 又玄集//

四十一 大蔵六 √金山志

√四十二 東坡別集

√四十三 宋広平梅花賦 瑣碎録 柳待制集

玩易齋詩集 清涼伝序

√四十四 大蔵七

四十七 東山外集抄

四十八 漢書

五十 湖隠録 法住記 耆域因伝 古今詩林

五十一 筆削記 掌中枢要 文句并疏記

√五十二 法華合論 搜神記 柘軒先生金湯編

博陵王問答抄 稽古略 日本書

中岩述

五十三 柳抄 五十四 <同> 五十五<同>

五十六 慈氏日工集

五十七 通論略抄

√五十八 元朝諸賢詩 葉室舍利相伝//

泉涌寺舍利相伝 片岡達磨寺化疏

大明皇陵碑 日本地藏感応記

大黒経<大昌○也[朱]> 十八羅漢贊

古今雜詠物集 批点古文

聖福寺仏殿記

六十一 江湖集抄 勝剛私記 付派侍?寺(考?)

√六十二 大明諸禅刹位次 本朝禅院諸山座位

七十 梵網古迹<私抄> 五教章<私抄>

七十二 容齋隨筆 中峯広録<并抄>

七十三 心経私記 百法問答抄<私記>

七十四 楞嚴義海 七十五<同> 七十六<同>

> 七十八<同> 七十九<同>  
 八十一 杜詩抄 八十二<同>  
 八十四 柳文口義 八十五<同> 八十六<同>  
 > 八十七<同> 八十八<同>  
 八十九<同>  
 九十一 釈門正統 玄冥録／／  
 √九十五 文献通考  
 九十六 群書備考  
 √九十八 源家小伝 自等持院殿至今相公  
 廿一歳清少納言撰之  
 大慧年譜 欣笑雲南遊日記  
 九十九 書史会要 愚溪業障藁  
 百 溪嵐拾葉集 √百四 春渚紀聞<自一  
 至十>【何子遠】  
 百七 漫温州志  
 百十 円覚集解  
 百十一 十二 十三 五教章抄  
 百十四 法華私記 碧岩私記 百十五<同>  
 百十六 毛詩左伝文選  
 百廿一 普門品科注 妙一菴就科注有増損  
 百二十九 紙衣膳  
 百三十一 法花伝 百三十二<同>  
 百三十六 蒲室疏抄 天英撰?／／  
 百四十六 山谷詩私抄 百四十六 百四十  
 七 百四十八  
 百四十九 百五十<同>  
 百五十二 法華採釈上 百五十二 百五十  
 三 百五十八  
 百五十九 百川学海

その他、目録に未掲載の「密参」三函も見出した。これは大覚寺派の解釈を記録した物のようで、江戸初期にかなり流布したものと聞いたが、これほどの量のものが残っているのは珍しい。これから研究してゆかねばならない資料である。ただ、国語学国文学の研究者には手に余る資料であるので、禅学関係者による精査を期待したい（そのためにも、複写刊行したいと思っている）。

仮名を含む資料については、写真撮影はほぼ終わっているの、新しい資料はほとんど

無い。ただ、上述の「密参」には、仮名書きのものを含み、「ワンデモナイ」「ソツトモ」「アレドモ」のような抄物特有の表現があり、江戸初期の抄物として扱ってもよいようである。大量の江戸初期の資料が出てきたわけで、興味深い成果が期待できる。ただ、これらの資料の性格を見極め、資料として利用するまでにはかなりの時間がかかりそうである。

研究成果は若い人々の研究発表や論文発表として表れたが、影印刊行については、この計画期間中には一冊も刊行できなかった。

抄物は大部なものが多いので、資料の性格を知るまでには、非常に時間が掛かる。簡単な内容調査、伝本調査、引用文献調査などでも、完全に終わるためには数年かかる。勉強をしながら、これらの作業をすることは極めて難しいことである。そのために、これらの成果を刊行してゆくという計画は、なかなか進まず、研究対象の資料が増えてゆくばかりであった。

例えば、唐の詩人柳宗元の文章を注釈した抄物「柳文抄」を例にすると、その中に現れる禅僧の名前は、夢巖祖応、中巖圓月、義堂周信、無因宗因、雲溪支山、継天寿叡、岐陽方秀、江西龍派、瑞溪周鳳、伯英徳俊、太白真玄、心華元棣、子晋明魏、勝剛長柔、天隱龍澤、惟肖得巖、その他、心田清播、蔵海性珍、慶仲周賀、綿谷周麤、一庵一麟などで、14世紀以降の錚々たる学僧の名前が挙がっている。日本の禅林では、古くから柳宗元の詩文の研究を積み重ねられてきたことが分かる。遅くとも中巖円月が元から帰朝した1332年頃、日本の禅林でも、柳宗元の文章に対する講義や注釈が始まっていたと思われる。その成果を集大成したのが、この「柳文抄」である。その長い注釈の歴史を見れば、この中に示される注釈の水準の高さが首肯されるのである。この知識は、ここで留まるのではなく、禅僧たちを通じて、江戸時代の漢学者へと引き継がれてゆくのである。

こういう点も、明らかになってゆくのが、本調査の目立たない成果の一つである。

もう一つ、目立たない成果がある。それは両足院住持、あるいは関係者の筆跡がかなり明らかになってきたことである。これは両足院所蔵の資料類が、誰の手で纏められたのか、誰が中心になっていたのかなどの情報を得るときに役に立つ。今のところ、利峯東鋭の手になるものが多いことが分かっている。大部な抄物を書写しているのが、利峯であるらしいが、その元となった資料はどこにあったのかについては、書かれていない。また、和仲東靖の手になるものは限られていること、梅仙東連の筆跡はやや不確定であるが、梅仙は漢籍類の書写に力を尽くしたらしいことなどがわかる。林宗二・林宗和の手になるも



のも、従来から知られているものが多いが、若干補足できた。林宗二・林宗和が、協力しながら、一つの本を写していることも分かり、彼等が本当に緊密な関係にあったことも、それら通じて感得することができるのである。このような論文の題目にならない知見も、その資料を理解するためには、重要であり、より正確で、より深い理解へと繋がってゆくものである。

論文の個数や著書の数が増え、中を利かせる世の中になっているが、そのために、厚い背景をもった研究ができなくなっている。このような背景を明らかにしながら、その資料を理解し、内容を考えるという姿勢は、時間の浪費と見えるが、これが本来の学問の立脚点である。この計画期間中には、目立った成果を公刊できなかったが、それは研究が停滞していたのではなく、このような地味な調査の繰り返しがあったからである。

5月に刊行予定の「柳文抄」が出る予定で、滞っていた他の資料の研究も目処がつきはじめているので、近々、次々と刊行できる予定である。若い研究者が将来、研究を続けて行けるかどうかは、それぞれの人生があるので、はっきりはしないが、研究の端緒は掴んでいると思うので、これからが期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 木田 章義 散文の歴史 単著 『文学部百周年記念論集 グローバル化時代の人文学』平成 19(2007)年 3月 pp315-338
- ② 田中 志瑞子 伝三条西実隆筆『毛詩国風編聞書』について、単著 訓点語と訓点資料 平成19年3月 pp43-119

[学会発表] (計3件)

- ① 山中 延之 聞書と抄物 京都大学国文学会 平成21年12月12日 京都大学文学部
- ② 田中 志瑞子 清原宣賢の左伝抄について 京都大学国文学会 平成20年12月7日 京大会館
- ③ 蔦清行 疑問表現で用いられるゾ 訓点語学会第98回 平成20年5月25日 京大会館

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

木田 章義 (KIDA AKIYOSHI)  
京都大学 文学研究科 教授  
研究者番号：30131486